

## 福島大学

訪問調査対象 プログラム名	国際舞台へ「ハバタク」！グローバル人材育成のための派遣交換留学生 養成プログラム
類 型	語学習得型×選択型

### A. 海外プログラムの詳細

#### 【要旨】

- 交換留学に必要な上級の英語力を育成するために、クイーンズランド大学（オーストラリア）の5週間の既存プログラムに派遣する。ホームステイで毎年10～20人程度が参加する。
- 派遣期間中に、東日本大震災や日本文化について事前に準備したプレゼンテーションをクイーンズランド大学の日本文化を学ぶ学生・教員に対して行う。現地教員によってプレゼンテーション指導を受ける。
- 本プログラム修了者は毎年3～4人程度交換留学に行っている。

#### 1. 教育活動、教育支援、アセスメントと対応した教育目標設定

##### 海外プログラム個別の教育目標が明確である

本プログラムの以前に、クイーンズランド大学（オーストラリア）が福島大学のために構築した3週間の語学研修プログラムがあり、学生に好評だった。しかし、費用が高く募集が不安定だった。このため、クイーンズランド大学既存の5週間の語学研修プログラムに変更し、航空券も自己手配に切り替えることで、以前のプログラムとほぼ同額で5週間実施する本プログラムが可能となった。

ただし、同大学としては5週間のプログラムだけで英語力が伸びるとは考えておらず、英語力の不足を認識し自分の中にある壁を壊してモチベーションを高めるための突破口として位置づけている。このため、本プログラムへの参加者をただ拡大するのではなく、本プログラム修了後に交換留学へ行くロールモデル的な学生を少数でもしっかりと育成することを目指している。

全学のディプロマポリシーと紐づけられてはいないが、2019年度に策定された新教育プログラムの3つの軸の1つがグローバル人材育成であり、この一環として本プログラムは位置づけられる。本プログラムの教育目標は以下の通り。

英語能力が中級レベル以上の学生で、英語圏への交換留学を希望する者の英語レベルを交換留学に必要な上級レベルに引き上げるとともに、英語による情報発信力養成を加味することで、国際社会のみならず、東日本大震災によって今なお復興途上にある東北地方においても活躍できるグローバル（グローカル）人材養成を目指す。

## 2. 海外プログラムの実施状況とその内容

**教養や英語スキルの修得にかかわる主目的のプログラムに加え、現地の学生や人々とのコミュニケーションにかかわるプログラムが明示されている**

【実施時期】 夏期 8 月～9 月および春期 2 月～3 月（年 2 回実施）

【実施期間】 5 週間

【実施場所】 オーストラリア・クイーンズランド大学

【参加学生数】 2019 年度は夏期 8 人、春期 2 人（例年 10～20 人程度）

【プログラムの具体的活動内容】

英語についてはクイーンズランド大学においてプレイスメントテストがあり、レベル 1～7 にクラス分けされる。福島大学生は概ねレベル 3～5 に所属する。平日は毎日英語 4 技能の授業を 2 コマずつ受ける。クラスごとにクイーンズランド大学の学生に聞き取りをするなどのアクティビティが組み込まれている。また、学生にまとまった授業外時間を提供できるように、英語の授業時間を朝早く始めたり、午後遅くの時間帯にしたりするなどの工夫がなされている。希望者は空いた時間でクイーンズランド大学の正規の授業を聴講できる仕組みも設けられている。同大学への交換留学を考えている学生は積極的に聴講している。

英語教育はクイーンズランド大学の既存のプログラムであるが、クイーンズランド大学の日本語・日本文化を学ぶ学生および教員を対象に、福島大生が行うプレゼンテーションについては独自プログラムの一部となっている。テーマは、元々は東日本大震災に関するものが中心であったが、先方からの希望もあり次第に日本文化全般に広がった。そして 2020 年度からは先方の日本文化の授業と内容をリンクさせたものに変更することで合意している。

また、このプレゼンテーションについては後述するように、日本で事前学習として発表資料を 7 割程度は完成させていくが、渡航後、日本文化を教える教員からアドバイスを受けて完成させ、プログラムの後半にリハーサルを経てプレゼンテーションを実施している。

最後に英語 4 技能のテストおよび成績評価があり、修了証書が発行される。

宿泊は全てホームステイとなっており、ホストファミリーはクイーンズランド大学が手配を行っている。

## 3. 事前・事後学習およびカリキュラム全体との関連

**事前・事後学習の両方が設定されている**

**現地での学修に関連する事前学習のコンテンツが用意されている**

**現地での学修に関する事後学習のコンテンツが用意されている**

英語については、事前学習は全体的には行っていない。ありのままの状態で行き、向こうでどれくらい通用するかを体験させることが狙いである。ただ、国際交流センター主催の英語の補修レッスンがあり、それを準備として受講する学生もいる。

現地でのプレゼンテーションのテーマについては、事前に学生が希望する発表テーマと、

クイーンズランド大学の学生が知りたい内容とを擦り合わせて決めている。具体的には、事前学習として学生がグループで発表したいテーマを決め、テーマが被らないように調整するとともに、そのテーマをクイーンズランド大学の教員に対しても共有することを通じて行われている。

また事前事後に全員が TOEFL を受験する。

事後学習としては TOEFL 受験以外に、日本語での報告書を書き次年度に向けての説明会で発表する。本プログラム参加後に交換留学を目指す学生は、さらに IELTS に特化した科目「上級英語」や、国際交流センターが提供する IELTS 指導の補修プログラム無料講座「インテンシブスタディ」などを受講している。

#### 4. 効果測定・アセスメント、カリキュラムマネジメント

**海外プログラムの成果を評価する何らかの仕組みがある**

**プログラム設計の共有、プログラムの修正機能、あるいは次年度への引き継ぎ体制については、特定のプログラム担当教職員の中でのみコンセンサスがとれている**

このプログラムのみで英語力の大きな伸びを期待しているわけではないが、参加者全員に TOEFL を渡航前と渡航後に受験させている。

参加者アンケートについては JASSO のアンケートを実施している。

プログラム改善については、事後学習で作成させる報告書や派遣学生の SNS 上でのコミュニケーションの状況を材料として、次年度計画の検討に活かすようにしている。改善例としては、3 週間プログラムから 5 週間プログラムへの変更が挙げられる。3 週間プログラムは福島大生向けに設計されたもので、最適な教育を提供できるというメリットもあるが、福島大生のみで受講することになるため日本語環境になりやすいというデメリットもあった。このためクイーンズランド大学の既存プログラムに変更して、日本語環境を減らすように変更した（ただし、学生インタビューによれば、2017 年度のあるクラスでは既存プログラムへの福島大学以外の参加者もすべて日本人学生であり、この問題は解決されない場合もある）。

#### 5. 本プログラムに参加しやすくするためのサポートや工夫

本海外プログラムで学修した授業に対しては、福島大学の「英語の語学研修にかかる学修の単位認定に関する要項」に基づき単位が付与される。

参加資金の援助については、JASSO からの奨学金以外に福島大学学生教育基金 3 万円が 2 名程度に支給されているほか、国際交流センターにて民間企業が提供する奨学金などを探して学生に紹介している。

## 6. 本プログラム参加者の他の海外プログラムへの参加

本プログラムの修了者には国際交流センターが交換留学に挑戦してみるよう積極的に働きかけている。その結果として本プログラム修了者から毎年3~4人は交換留学に行っている。

### B. 学生インタビュー

#### 1. 福島大学学生1（理工学群共生システム理工学類産業システム工学専攻4年）

##### （1）入学前の海外・異文化体験、海外プログラム参加に対する気持ち

高校2年生の冬に、SSHのプログラムの1つとして、1週間ぐらい台湾を訪問して、現地の高校生と交流したり、大学を見学したり、国立公園や地震の記念施設を訪問するというプログラムに希望して参加した。「何かをしたい」というよりは、「せっかくの機会だから」という軽い気持ちだったと思う。中高一貫校で、すごく英語に力を入れている学校で、英語も得意なほうだったので、せっかく英語をここまでやったのなら、大学に行ってから、海外に行ってみていいかなとは思っていた。

大学に入って、1・2年生の間は授業で忙しく、3年生の後期になると研究室に所属になるので、2年生の春休みだったら何にも縛られずに、自由に時間を使えると思い、その期間を利用して留学してみたいと考えた。短期の海外留学はいろいろあったが、たまたま図書館を通りかかった時に国際交流センターのポスターを見て、いつもは夏にあるクイーンズランド大学の語学研修が春にも実施されるのを知って、大学が支援してくれるのなら、それが一番安心だと思ったので申し込んだ。

##### （2）参加した海外プログラム

オーストラリアのクイーンズランド大学の語学学校 ICTE で5週間の語学研修に参加した。午前中の2コマが語学の授業で、IELTSを意識したような授業内容だった。4技能に分けて学ぶのではなく、いろいろと組み合わせあった授業だった。午後は自由に時間が使えて、語学学校が提供するアクティビティやツアーに参加したり、現地の大学生と交流したり、街中に出たりした。また、研修の終盤には、日本語を学んでいる現地の学生に対して、日本文化に関するプレゼンをグループで行った。その学生に、クイーンズランド大学の正規の授業にも連れていってもらった。大きな教室でも学生がどんどん質問していて、日本の大学の授業との違いに驚いた。

宿泊は、ホームステイだった。料理も美味しく、家族といろいろ話せて、恵まれた環境だった。プレゼンの前には、スクリプトを見てもらって、「ここをちょっと直した方がいいよ」とアドバイスまでもらった。ホストファミリーのおかげで、もう一回交換留学に行こうという思いが芽生えたので、感謝している。

### (3) 事前・事後学習について

国際交流センターが主催する勉強会が 2 回ほどあって、現地での過ごし方とか向こうでの暮らし方とかに重きを置いた内容だった。海外へ初めて行って、ホストファミリーがいるとはいえ、勝手がわからないので、とても助かった。あと、留学希望者向けではないが、理工の学生向けに英語の講座が開かれていて、3・4 年生向けだったと思うが、それにちょっと参加したぐらい。英語はどうにかなると思っていたし、それほど勉強せずに行ったが、もっと準備しておくべきだった。

また、グループで、現地でのプレゼンに向けての準備をしていった。日本文化に関するプレゼンということで、日本の伝統行事をテーマに 1 年を 4 つの時期に分けて、メンバーで分担して、ある程度プレゼンができる状態にまで資料を作成した。

帰国後は、TOEFL ITP を受験した。また、事後学習ではないが、交換留学に行くために、国際交流センターの週 2 回の IELTS 対策講座に通い始めた。

### (4) 成長を感じる点

語学力以外には、多様性を学んだと思う。語学学校のクラスは、日本の大学生が多かったが、それでもイタリアやラオスなど、馴染みのない国の人たちと接する中で、「みんな国は違っていても、人は人だ」と感じて、構える必要はなく、おおらかな目で見られるようになった。

### (5) 満足・不満足な点

終わってみればすごく短い期間だったが、現地の暮らしぶりを味わえたことと、自分の英語の未熟さを知って、このままじゃいけないと思えたことが満足点。それが帰ってきてからの原動力になった。現地で知り合ったオーストラリア人が、日本語を学んで 3 年くらいで普通にしゃべっていて、ちょっと悔しかったこともあって、自分ももっとできるはずだと思い、もう 1 回クイーンズランドに戻ろうと思った。そう思えるような経験ができたことが満足点。

不満点としては、実施期間が日本の大学の春休み中で、語学学校のクラスの学生 20 人のうち、日本以外から来ている学生が 3 人ほどだったこと。自分は外国人の方とかかわろうと思って参加していたので、あえて日本人だけで固まらないようにしていた。

### (6) 今後の学修

まずは、もう 1 度、クイーンズランド大学で学びたいと思い、国際交流センターの IELTS 対策講座に通った。当初のスコアはさんざんなものだったが、講座に通うにつれスコアが伸び、派遣基準を突破して、4 年次後期から 10 か月間の交換留学を実現できた。交換留学では、専門の学修で専門用語も多く、言葉の面でもまた苦勞したが、幸いクイーンズランド大

学の授業はすべて収録されており、後からオンラインで何度でも聴けるので、なんとかついていった。

交換留学の経験も含めて、現在の研究の役に立っていることは間違いない。今年だけで英語で書いたポスターが3つぐらいあった。この分野は、日本語の雑誌は少なく、論文はほとんど英語、学会の抄録も英語で提出し、シンポジウムも公用語は英語、発表もスライドもすべて英語で、英語ができないと、最新のことは知ることはできない。来年から大学院に進むが、その入試でも英語が使えた。

今、興味のある研究ができていますので、将来は研究の道に進みたい。でも、失敗したら、失敗したで、20代の間ならば、ワーキングホリデーでどこにでも行けるので、また海外に行きたいと考えている。

## 2. 福島大学学生2（人間社会学群人間発達文化学類文化探究専攻4年）

### （1）入学前の海外・異文化体験、海外プログラム参加に対する気持ち

大学に入学するまでは海外体験も異文化体験もなく、せいぜいALTと授業で話したことがあるくらいだった。高校で英語が好きになり、英語の教員になりたいと考えるようになったが、家族に経済的な迷惑をかけたくないので、入学までは留学は全く考えていなかった。

それが海外プログラムに参加したいと変わったのは、入学後すぐに友人が（本プログラムの前身にあたる）3週間のクイーンズランド大学での語学研修に参加することになり、それに刺激されて自分も参加したいと思った。家族も「奨学金が出るならいいよ」と言ってくれたので参加を決めた。

### （2）参加した海外プログラム

最初の海外プログラムには、英語を勉強しないまま参加し、ホームステイ先がスリランカ出身の家族で、全く発音が分からなかった。自分が習ってきた英語が英語だと思っていたのでショックで、特にワールドイングリッシュができるようになりたいと思った。

帰国後は大学での勉強の仕方が変わった。1年次前半は楽勝と言われる英語科目を履修していたが、帰国後は大変でもネイティブの先生の英語科目を履修するようになった。

また、留学生に対して英語でアテンドしつつ福島を紹介する「福島アンバサダープログラム」にも参加したが、英語が通じない。福島のことを伝える力が身につけていないと痛感し、もう1度語学研修に行こうと思った。それが、本プログラムだった。

本プログラムの現地での内容は、授業は9時～13時で、1日2～3コマを受講した。初日にクラス分けがあり、中の上のクラスに属したが日本人がほとんどで、それ以外に中国人が1人、アラビア系が3人いた。座学中心で、日本と違ったのは教科書ではなくニュース番組などを題材にし、何が聞き取れたか話し合ってみようとか、それぞれが聞き取れた内容を持ち寄って全体像を構成するというのが多かった。テキストはなく、文法とそのほかの4技

能の授業に分かれていた。

授業が終わると、クイーンズランド大学の中に、日本のことが好きな学生たちのサークルを見つけたので、そこに毎日のように行き話をしていた。また、週1回、大学外で英語の勉強会が開かれていることを知り、その勉強会にも参加した。

ホームステイはシンガポール人の家族で、英語も聞き取りやすかった。経験豊富な人たちで、私にいろいろと話しかけてくれて、帰宅してからも、朝出かける前にも時間を取ってくれて会話が弾んだ。

プログラムの最後の方で、福島や日本文化についてのプレゼンテーションをクイーンズランド大学の学生や先生20人くらいを対象に行った。私たちのグループはラーメンを取り上げ、日本で内容を準備して行った。英語授業ではプレゼンスキルの練習はしなかったが、プレゼンのためにグループで週1回集まって練習をしたし、最後のリハーサルではクイーンズランド大学の先生が指導してくれた。

プレゼンは5人グループで10分くらい。1人2分話すが、自分ではうまくいったと思う。聞いていたクイーンズランド大学の学生が興味をもって、終了後に質問しに来てくれた。

振り返ると、1回目の語学研修は準備不足だった。楽しかったが充実はしていなかった。2回目はしっかり準備していったので改善点が明確になったし、充実していた。また現地の人との交流を意識的に積極的に行えた。

### (3) 事前・事後学習について

事前学習としては、グループ5人でプレゼンの準備をした。福島の魅力についてという枠の中でテーマをラーメンに決め、写真だけでなく動画を撮るなどパワーポイントの準備に1週間かけた。

また、自分としてはネイティブの英語授業の履修や、福島アンバサダープログラムへの参加、動画を使ってのリスニングに自主的に取り組んだ。

事後学習としては、報告会があったが参加できなかった。パワポづくりには参加したが、それ以外には、日本語でのレポート提出があった。

### (4) 成長を感じる点

まず英語力がついた。現地の人とかなり喋れるようになった(TOEFLの点は下がったが)。そして、自分で主体的に動く力やリーダーシップがついたと思う。2回目だったので、周りに積極的に関与できるようになった。

課題としては、日常会話は問題ないが社会的なテーマになると言葉が出てこないということに気づいた。また日本人はシャイで自分から喋らないが、これではいけないと感じた。

### (5) 満足・不満足な点

満足しているのは、レベルが高いクイーンズランド大学で5週間学べたこと。

不満足なのは、クイーンズランド大学が広すぎて何をやっているか分からなかったこと。正規の科目を聴講できることは知らなかった。

#### (6) 今後の学修

こんなに勉強したのにまだ英語ができない。教育実習直後にこれで質の高い英語教員になれるか不安になり、1年卒業が遅れても長期留学に行く決意をした。JASSO 奨学金+授業料免除+母子家庭奨学金も出るので、母も「行ってきなさい」と背中を押してくれた。

オランダでは、言語学を学びたかったが定員オーバーでビジネス・インターナショナル・ファシリティマネジメントを学んだ。キャリア教育としてビジネスもあるかなと思った。オランダ留学では英語も伸びたし視野も広がった。帰国後はまず英語を使う仕事に就いて、そこで経験値を広げてから将来は英語の先生になろうと考えている。

### 3. 福島大学学生 3 (理工学群共生システム理工学類 1 年)

#### (1) 入学前の海外・異文化体験、海外プログラム参加に対する気持ち

高校1・2年の時に、これから英語は絶対に必要だろうと思って、英会話教室に通っていた程度で、海外経験や異文化体験はない。英会話教室も英単語や文章の要約などが多く、「会話ができる」というレベルではなかった。英語は、中学では得意とまではいかなかったが、高校に入ってから英会話教室に行ったこともあって、成績は良かった。

小・中・高と、部活と勉強しかやってこなかったが、大学に入ったら自分で自由になる時間もできるし、ずっと国内にとどまっている理由もないので、当然のように海外に行くものだと思っていた。日本が嫌いなわけではないが、テレビなどを見ながら、親とも「海外に住むならここがいい」といった話をよくしていた。

入学式の翌日に、国際交流センターに行って、「初めて海外に行きたいのですが、いいプログラムはありませんか？」と質問したら、クイーンズランド短期語学研修のことを教えてもらった。いつか長期留学をしたいと思っていたので、まず5週間というのは、最初の一步としてちょうどいいと思った。

#### (2) 参加した海外プログラム

クイーンズランド大学の語学学校で、現地のオーストラリア人の先生に教えてもらった。授業は18人ほどの少人数で、初日にプレイスメント・テストがあって、7段階ぐらいのレベルに分かれた。生活はホームステイで、大学の近くにホームステイ先があった。7時半に家を出て、8時15分から2時間の授業で、30分休みの後、また2時間の授業。エッセイを書いたり、賛成・反対の意見を書いたりするほか、スピーキングの授業が特に多かったと思う。

ホームワークは、あまり多くなく、帰ってから30分ほどで終わった。午後は、研修に来



ていた学生たちと一緒に、買い物や散策に出かけたりしていた。土・日は学校がないので、海などに小旅行に出かけた。研修の終盤に、日本に関することをテーマに、グループでプレゼンを行った。自分のグループでは、東京オリンピックをテーマに、2～3週間前から準備を始めた。毎日30分～1時間程度グループで話す時間を作って、自分がリーダーシップを発揮して計画を作って、地域のこと、競技のこと、福島と東京オリンピックについてなど分担して、準備を進めた。前日に先生にリハーサルを見てもらって、本番は、日本語を勉強している現地の学生を対象にプレゼンを行った。

### (3) 事前・事後学習について

国際交流センターで開かれている、英語に親しむための講座や留学希望者のための講座に通って、コンスタントに英語に触れるようにしていた。前期は、英語以外の勉強が忙しすぎて、それ以外には準備といえるものはできなかった。もしかしたら、高3生の時のほうが、英語力はあったかもしれない。

研修に行く前と後でTOEFL ITPを受験した。帰国後の受験は、戻ってから時間が経っていたので、その間、意欲的に英語の勉強を続けていたこともあって、スコアは100ぐらい伸びた。

### (4) 成長を感じる点

語学力というよりは、英語を使うことにためらいがなくなったと感じる。特にリスニングがよくなったので、戻ってから、集中的にリーディングの勉強をした。あと、語学力とは関係なく、コミュニケーション力はついたのではないかと思う。分からないことは聞けばいい。「なんとかなる」と考えられるようになった。

オーストラリアに行って、日本の考え方と海外の考え方がずいぶん違うことに気付いた。オーストラリアの人は、人がどんなに奇抜な格好をしていても、全然気にしないけど、日本の人はすぐに敏感に反応する。自分にはオーストラリアの人の考え方がマッチしていて、研修から戻ってからは何でも柔軟に考えられるようになった。

また、自分が1年生で年齢が一番下だったと思うが、プレゼンの準備ではリーダーシップをとって準備を進めていたので、計画力がついたのではないか。

### (5) 満足・不満足な点

日本人が多いということは、ちょっと不満。研修時期が夏休みだったので、他の日本の大学生もたくさん来ていた。18人クラスで、15人が日本人。結局、日本語を使う場面も多かったが、得るものは多くあったので、すべてに満足している。5週間は短いようだが、5週間あればなんでもできる。密度の濃い留学になった。夜、出歩いたときは、よく分からない人にかまれたり、菓物を交換しているような場面を見たりしたこともあったが、そういうことも含めて経験なので、満足している。

## (6) 今後の学修

研修から戻ってから、「長期留学に行きたい」という思いがより強くなり、英語以外の勉強を少し減らして、英語の勉強に注力できるようにした。2年次の夏からイギリスのグラスゴー大学への交換留学を目指して、IELTS の基準を突破できるように頑張っている。グラスゴー大学は、共生システム理工学類の先生のおかげで新潟大学と協定を結んだ大学だそうで、ジェームズ・ワットを輩出した、この分野では優秀な大学。物理学を学ぶには最適な環境だと、国際交流センターの方と相談しながら決めた。

共生システム理工学類では2年生で交換留学した学生はいないので、パイオニアになりたい。誰もやったことのないこと、珍しいと言われることをやってみたい。福島大におさまっている気はさらさらしない。

## 4. 福島大学学生 4 (人文社会学群経済経営学類国際地域経済専攻 4年)

### (1) 入学前の海外・異文化体験、海外プログラム参加に対する気持ち

大学に入学するまでは、ALT の先生から教えてもらったことがあるくらいで、外国人との交流も海外渡航の経験もなかった。英語は得意科目であり好きだったが、浪人の時は受験英語から距離を置きたくなり、好きだった作家の英語の本をひたすら読んでいた。

福島大学は、地元の国立大学であること、経済経営学類はグローバル人材の育成と英語を実践的に身につけることを掲げていて、二次試験が英語だけだったこともあり受験した。

留学については、1年次のゼミの「教養演習」で、カナダ人の先生から現代に求められるグローバル人材について学び、漠然と国際交流に興味を持った。その後、国際交流センターが主催する Fukushima Ambassadors Program (FAP) で震災後の福島について英語で学んだり、学内外で留学生との交流を通じて異文化交流の機会を得たりしたことで、中長期の留学を意識するようになった。

### (2) 参加した海外プログラム

オーストラリアのクイーンズランド大学附属英語学校 (ICTE) で 5 週間英語を学んだ。初めての海外渡航で、現地での活動はすべてが新鮮で、毎日新しい発見があった。

初日にプレイズメント・テストがあり、7段階にクラス分けが行われ、自分は上から2番目のクラスに配属された。クラスは午前と午後に分かれるが、午前のクラスで、午前中に1コマ2時間の授業を2コマで週5日間、「4技能」に相当する授業がすべて英語で行われた。授業では、ニュース番組を見たり、クラスの人と英語を使って会話をしたり、とてもバラエティに富んでいた。どの講義も予習復習が義務付けられ、最初の1週間は苦勞したが、講義は少人数(1クラス十数人で、授業は主に4, 5人に分かれてのグループワーク)だったため、学生・講師との距離が近く、わからないことはすぐに質問をし、それを学生間で共有することができた。

また、最終週にグローバル人材にふさわしい情報発信力の養成を目的とした英語プレゼンテーションがあった。これは、福島大学の学生のみで7～8人のグループが編成され、留学前にテーマや内容を決め、発表のための資料等を準備したうえで、英語学校の教員の指導を受け、クイーンズランド大学の教職員と「ワサビ」という日本語を学んでいるサークルの学生に対して日本の文化を英語で紹介するものであった。発表は事前に準備をして原稿を読み上げるものだったので難なくできたが、発表後の質問に答えるのは大変だった。

### (3) 事前・事後学習について

事前学習としては、6月～8月上旬にかけて事前学習会があり、パスポートの申請などの渡航準備、危機管理、オーストラリアの歴史、社会情勢について学んだ。加えて、国際交流センター主催の語学力向上を目的とした英語の勉強会に参加し、日常生活で求められる表現から複雑な英文の読み方、書き方を学んだ。

事後は、学内のアンケートに回答し、報告書を提出した。英語に関しては、交換留学に必要な語学要件となっているIELTS対策もあり、国際交流センター主催の勉強会に週3回、継続して参加している。IELTSは6.5まで取れるようになった。

### (4) 成長を感じる点

英語が通じなくても何とかかなるかなと思って参加したが、現地での生活を含めて様々な体験をしたことで、動じずに判断し、行動できる自信がついた。また、自分のことは自分でやるという習慣ができ、帰国後は頻繁に料理をするようになった。

英語については、TOEFLの結果は事前よりも事後のほうがよかったが、それよりも、最初の1週間は、特に聞き取りの授業にはまったくついていけず、グループワークもうまくいかず悩んでいたが、予習復習をしながら食らいついていったおかげで研修後半にはきちんと意見が交わせるようになったことが何よりもうれしかった。

このプログラムに参加する前は、特に期間にこだわることなく、異文化交流ができるプログラムに参加できればと考えていたが、帰国後は、より長期のプログラムに参加したいと考えるようになった。

### (5) 満足・不満足な点

初めての海外渡航であったが、大学のサポートのおかげで安心して英語研修に参加し、外国の地で、異なる言語でプレゼンテーションができたことはよい経験になったと思う。また、勉強の合間に現地を見て回り、直接街を感じることもできたことは、その後の研究にもプラスになっている。

ホームステイ先は、メキシコ人の若い夫婦と年長と小学生の4人家族のもとでお世話になった。普段の何気ない会話や子供と遊んだりするなかで、体に英語をしみこませることができた。

不満な点をあげるとすれば、少なくとも当時は支給される奨学金の額が1年生と他学年で異なっていたこと。自分は1年生だったため、半額の支援しか受けられなかった。それから、国際交流センターが中心になって頑張っているのはわかるが、できれば学部（経済経営学類）としても、グローバル人材の育成や英語力向上をもっと積極的に推進してほしいと思う。

#### （6）今後の学修

留学については、震災して間もなかったということもあったのか、主催している団体から様々な支援をいただき、短期2回、長期1回の留学を経験することができた。

今後の予定としては、大学院に進学し、社会政策や生活困窮者の自立支援の研究を続けていきたいと思っている。海外にも機会があったら行ってみたい。将来は、地元で公務員になるか、労働基準監督署など、専門性を活かせる所に進めたらと思っている。